

ノスタルジアと社会批評

尾山 晋

はじめに

ノスタルジア、つまり過去の事物や時代に対する好意的で感傷的なまなごしは、現代の消費文化において珍しいものではない。例えば、過去における人々の生活を描いた映画や、大衆文化に関するジャーナリスティックな年代記では懐古のまなごしが散見される。

ジャーナリズムであれ、専門的な歴史記述であれ、過去の事物を、「それが元々あったとおり」に再現することは不可能だが、だからこそ、ノスタルジアは左翼の批評家や社会学者らの関心を呼んできたとも言える。ノスタルジアへの評価は様々だが、否定的なものが多い。過去が現在の状況と対比され、肯定的に語られるさい、それが保守主義的な性格を持つ場合が少なくないからだ¹。その一方、ノスタルジアが、資料の検討を基に専門家が記述する歴史と比較され、前者には専門家の権威に従う姿勢が見られない、として肯定的に評価されることもある (Samuel 1994)。また、ノスタルジアにおいて、否定的に認識される現在の状況とは別の状況をもたらした可能性が、過去の事物に見出されることもあるとして、保守主義に対する批判の可能性をノスタルジアに認める議論もある (Wright [1985] 2009)。

本稿の目的は、現代の消費文化に見られるノスタルジアに対する文化批評や社会学での評価を振り返り、ノスタルジアが社会批評にとって持つ重要性を考察することだ。まず、ノスタルジアという用語の語源と概念的変遷に触れ、次に、ノスタルジアへの評価を概観する。そして、これらを念頭におき、1970年代後半にイギリスで出版された反人種差別運動の雑誌、『テンポラリー・ホーディング』(Temporary Hoarding) 掲載のある記事における50年代のロックンロール音楽の描写に注目する。

近現代とノスタルジア

17世紀に医学用語として生まれた「ノスタルジア」が、過去の時代に対する

憧れを指すようになったのは 19 世紀末だ。この用語は 17 世紀のスイス人医師ホファー (Johannes Hofer) により、当時、故郷から離れて暮らしていたスイス人傭兵らが帰郷を望み苦しむ様子を指して、ギリシア語でそれぞれ「帰郷」と「苦しい状態」を意味する「ノストス (nostos)」と「アルジア (algia)」を組み合わせて、造り出された。当時、「ノスタルジア」と診断された人々には憂鬱、食欲不振、自殺を試みるといった症状が見られたという。しかし、その後、19 世紀末頃になると、この用語は欧米で広く文物や日常会話に登場し始め、地理的に離れた場所に対する望郷の念よりも、時間的に隔たり、現在とは異なる時代への懐古を指して使われることが多くなる (Davis 1979)。つまり、この用語は傭兵の間で見られた症状を指して使われていた元の文脈を離れ、過去に対する好意的なまなざしを意味するようになった。社会学における初期のノスタルジア研究で知られるフレッド・デーヴィスの言葉を借りれば、用語としてのノスタルジアは「非軍事化 (demilitarization)」と「脱医学化 (demedicalization)」を経て、現在の状況と対置される「特別な性質を付与された過去」(Davis 1979: 3-5, 13) への憧れを指すようになった²。

19 世紀から 20 世紀は、ノスタルジアの概念的変化に加え、ヨーロッパ精神史において、過去の時代に対する関心が高まりを見せた時代だ。近代市民革命や産業革命による社会変容に伴い、この時代のヨーロッパでは「失われた」共同体のあり方が関心を集めた。例えば、精神史研究でよく言及される事例が、社会学者フェルディナンド・テンニースによるゲマインシャフト、つまり血縁や地縁に基づく共同体と、近代において支配的なゲゼルシャフト、つまり何らかの目的を達成すべく形成される利益社会の対比だ。リチャード・ターディマンによれば、これら 2 つの社会類型の対比自体が、過去への関心が高まったこの時代の産物だという (Terdiman 1993: 38-42)。また、デヴィッド・ロウエンソールは、19 世紀末以降の欧米では、登場人物が過去の時代を訪れるという内容の SF 小説が多く書かれ、時間旅行者の目に、過去が「外国」のように映るほど隔たったものとして描かれる傾向があったと指摘する (Lowenthal 1985: 14-27)³。

過去の事物への高い関心は現代の消費文化にも見られる。例えば、1900 年頃のイギリスにおける人々の生活空間を模した「ウィガン・ピア・センター」など、観光社会学で「ヘリテージ・サイト」と呼ばれる、過去の時代における生活や出来事に関連した観光地は数多くある (Urry 1990; Rojek 1993)。また、1960

年代末以降、米英では 50 年代に流行したロックンロール音楽が再び注目を集め、往時の若者を描いた映画『アメリカン・グラフィティ』(1973) がヒットした。さらに、歴史家ラファエル・サミュエル (1994) が「レトロシック (retrochic)」と呼んだ、過去の商品デザインを借用した商品——例えば、ポール・スミスがデザインした古い労働着風の服や、50 年代アメリカのスタイルをモチーフにしたフォッシル (Fossil) の時計など——は数多くある。

後退と回復

消費文化における過去の事物に対する好意的なまなごしについて、左翼的な批評家や社会学者たちによる評価は様々だ。例えば、フレドリック・ジェイムソンは、『アメリカン・グラフィティ』や「ル・モード・レトロ」と呼ばれる同種の映画を、「皮相的な (depthless)」イメージの戯れによる、「過去らしさ (pastness)」——例えば、「1950 年代っぽさ (“1950s-ness”）」——の仄めかしであると評した。さらに彼は、後期資本主義社会の消費文化を支配するのは、新しい様式の出現よりもこうした戯れであり、しかもそれは指示対象である歴史へのアプローチを困難にすると批判した (Jameson 1991:19)。対照的に、サミュエルは同様の事例について、専門教育を受けた歴史家が記述する歴史の権威に従う姿勢が見られないとして評価した (Samuel 1994:112)。こうした議論に加え、ノスタルジア論で強い関心を集めてきた問題が、20 世紀後半の消費文化におけるノスタルジアにしばしば見られた保守主義との結びつき、正確に言えば、それらが一体になったさいにしばしば見せた反動的な性格だ。

ノスタルジアが「伝統的な」価値観の復興を訴える言説と結びつく場合は多くあり、これは批判の的となってきた。例えば、レーガン時代のアメリカでは、「小さな政府」と「伝統的な」価値観の復興を唱える新右翼が、「男は男、女は女」といった価値観に基づく安定した秩序があったとして、過去の時代を理想化した。これはフェミニストによる批判を招いた (Doane & Hodges 1987)。このように、過去の時代が肯定的に語られるさい、男女の不平等など、かつて黙認されていた社会的問題が看過されることは少なくない⁴。また、イギリスで戦後の経済衰退期に発展した「ヘリテージ産業」と呼ばれる産業は、文化史家ロバート・ヒューイソンによる批判で知られる。「ヘリテージ産業」には、先に触れた「ヘリテージ・サイト」に代表される観光産業、地方の生活をテーマにした「カントリー・ハウス・スタイル」を売り出すローラ・アシュレイな

どのアパレル産業、さらに、地方の古い共同体を描いたテレビ・ドラマを放映するマス・メディアなどが含まれる (Hewison 1987: 76-7, 135)。先に触れたジェイムソンの議論を援用し、ヒューイソン (1987: 139) は、ヘリテージ産業の商品を、右傾化が進むサッチャー時代のイギリスにおいて、社会の改革を妨げ、「過去に関する誤った皮相的なイメージを投影する牢獄の壁」と評している。

確かに、ノスタルジアと保守主義、特に、「伝統」と称されるものへの反動的な賛美が一体になる場合は少なくない。しかし、過去に対する好意的なまなざしは常に保守主義と一体なのだろうか。このような問題を提起するのが、ステュアート・タノック (1995) だ。彼は、否定的に認識される現在の状況からの「後退 (retreat)」と過去の「回復 (retrieval)」という「ノスタルジアの構造」が、「伝統的なヒエラルキーに基づく社会」の肯定といった内容と常に一体だとは限らないと述べる。タノックによれば、「ノスタルジックな人々」は「不安定な現在に直面し、安定した過去を望むかもしれない。」しかし、彼は、「ノスタルジックな人々が、固定化された、静止した、融通の利かない現在に直面し、動きに満ちて、開かれていた [中略] 過去を求めることもあろう」(Tannock 1995: 455-6)、と述べる。それゆえに、彼は、個別的事例の内容や語り手、受け手への批判をノスタルジアの構造に関する批判と区別すべきだとする。さらに、彼は、ノスタルジアの構造は「革命」を唱える立場にも有用だと指摘する。

後退と回復は両義的に見なされるべきだ [中略]。回復には反動的な集団にも、革命的な集団にも、支配的な集団にも、従属的な集団にも使い道がある。[中略] さらに、後退と回復が完全に分離することはなく、個々のノスタルジックなヴィジョンには、これら両方の要素がある——ノスタルジアによって呼び起される別の世界への可能性は、結局、現在の日常世界 [への直面] の延期と同時にそれに対するオルタナティブも生み出す (Tannock 1995: 459)。

このように、タノックは、現在からの後退と過去の回復や再生という構造は、「革命的な集団」に利することもありうるとする。

タノックは、ノスタルジアが「革命的な集団」にとっても有用だと述べるが、過去を肯定するまなざしは、保守主義に対する何らかの批判に結びつきうるのだろうか。ここで、カルチュラル・スタディーズの研究者、パトリック・ライト ([1985] 2009) による議論の参照は有益だろう。彼は 80 年代のイギリスで、

「ウェット」と呼ばれる旧来の保守派、そして、新右翼や時には一部の左派が「国民／国の過去 (the national past)」を語る状況に注目した。例えば、地方にある貴族の館が、修復保存されるべき「国民／国の遺産」として話題になり、また、ロンドンの黒人住民に対し不満を持つ白人住民数人の発言を集めた雑誌記事の中で、黒人住民が増える以前の時代が暴動や教育問題のなかったものとして描かれる、というように。ライト (2009: 137) は、こうして構築される過去の姿が、国民のアイデンティティという名の下に、社会における支配関係を覆い隠す、と評する一方、ノスタルジアが、この「国民／国の過去」に対する批判となる可能性もあると指摘する。ヴァルター・ベンヤミンによる「歴史哲学テーゼ」の一節を引用し、彼はこう述べている。

保守党が支配するこの国に関する注意深い考察は、その文化的な個別性を分節化するような見解、現代社会における異種混交 [heterogeneity] を尊重し、[保守党とは] 別の一貫性を持つ政治的原則を作り出す分節化とともに行われねばならない。我々は、[保守派が語る]「国民／国の過去」が日常における歴史に関する意識を十分に表すものではなく、また日常におけるノスタルジアが[「国民の過去」の表象を] 批判し、攪乱するポテンシャルを持つ、と知ることから始めるべきだろう。[中略] 日常における歴史的な存在についての感覚は、好戦的な愛国主義として表現されることもあるが、「危機において光る記憶をつかむ」(ベンヤミン) ラディカルなニーズ——現在の日常生活において認識／実現されず、[中略] 公式の象徴体系において認識されることがない——があることも示している (Wright 2009: 26-7)。

ライトが用いる「歴史に関する意識」や「歴史的な存在についての感覚」という表現は、彼が依拠する哲学者アグネス・ヘラーが用いた表現であり、補足が必要だろう。「歴史に関する意識」は、ヘラー (1983: 4) による説明を用いれば、日常における人々の「我々はどこからやって来たのか」、つまり、どのようにして現在に至るのか、という問いに対する答えだ。この答えは時代毎に変化し、そこで様々な事物に関して示される認識と、その認識をもとに社会が潜在的に構築しうる知識体系には、時代毎の限度ないしキャパシティがある。また、「歴史的な存在についての感覚」とは、「歴史的な発展や変化を感じること」(Wright 2009: 16) を意味する。つまり、保守派が語る「国民／国の過去」は、イギリスにおいて混交する様々な勢力が、「我々はどこからやって来たのか」という問いに対し潜在的に出しうる答えを反映してはいない、とライトは主張

する。

また、ライトが保守主義を批判する上で一つのキーとして考えるノスタルジアを理解するには、ベンヤミンの歴史哲学を参照する必要があるだろう。ベンヤミン自身はノスタルジア論を書き残してはいないが、百貨店の前身となったガラス天井のアーケード街、「パサージュ」に関する研究や、「歴史哲学テーゼ」（1969）を通じた彼の思索は、ノスタルジア論への示唆に富む。『パサージュ論』における「文化的弁証法についての小さな方法論的提案」（ベンヤミン 2003b: 176）と題した一節で、彼は歴史的な事物をそれぞれ二つの部分に分けて考えることを提唱する。一つは「実り多き」、「未来をはらんだ」、「積極的な」部分だ。例えば、パサージュは、その最盛期であった 19 世紀前半のフランスでは、ヴォードヴィル・ショーの中で「メロン」のような暮らしを実現する「温室」として賛美された（ベンヤミン 2003a: 115）。「実り多き」部分とは、このような、より良き生活や世界への希望やポテンシャルだ。その一方で、この希望もいずれは潰えて、流行の商品は廃品の「廃墟」と化す。この「廃墟」と化した状態が、歴史的な事物のもう一方の部分であり、ベンヤミンは「死滅した」、「消極的な部分」と呼ぶ⁵。こうした思索を通じ、彼が提案したのは、商品に限らず、過去の事物が持っていたが潰えてしまった可能性、つまり「実り多き」部分への注目だ⁶。ライトが引用した「危機において光る記憶をつかむ」とは、「廃墟」に埋もれた「実り多き」部分を認識することを意味する。つまり、時代の変化を感じ、過去の事物にまなざしを向けることは、公式の知識体系たる「国民／国の過去」において認識されないポテンシャル——否定的に認識される現在とは別の状況をもたらしたポテンシャル——を救い出し、保守主義への批判ともなりうる、とライトは指摘したのだ。

ノスタルジアを必ずしも保守主義と同一視しない議論を、社会学者のピカリングとケイトリーの言葉で総括できるだろう。すなわち、ノスタルジアは「脱魔術化に対するメランコリックな反応」と「ユートピア的な衝動」により駆りたてられる、矛盾をはらんだ現象として理解できる（Pickering & Keightley 2006: 936）。つまり、ノスタルジアは、ある事物の終わりに対する憂鬱と、潰えた希望や可能性、あるいは、廃れてしまった慣習や価値観を再生させ、現在とは別の世界へ向かおうとする動きをはらんでいると言える⁷。

50年代ロックンロールのリバイバル

ここまで、現代の消費文化におけるノスタルジアと保守主義の結びつき、特にそれがしばしば帯びる反動的な性格に対する評価を概観してきた。ノスタルジアが反動的な性格を帯び、旧来の差別などに対する黙認につながる場合は確かに多い。この点は念頭に置く必要がある一方、ノスタルジアが保守主義への批判になりうるというライトやタノックの指摘も注目に値する。しかし、ライトやタノックの議論は重要な示唆を与えるものである一方、具体的事例の検証を必要としているようにも思われる。そこで本稿は、保守主義への批判となるようなノスタルジアについて考えるべく、先に触れた1960年代末以降の米英におけるロックンロール・リバイバル期の事例を取り上げる。紙面に限りがあるので、本稿は76年にイギリスで始まった反人種差別運動、「ロック・アゲインスト・レイシズム」の雑誌『テンポラリー・ホーディング』に掲載されたある記事における、50年代ロックンロールの描写に注目する。

先に触れたように、米英では1960年代末以降、50年代に流行したロックンロール音楽が再び人気を集めた。エルヴィス・プレスリーのように、50年代から人気を維持する歌手もいたが、60年代初頭以降、全体的に50年代風ロックンロールの人気は下火であった。しかし、68年以降、この音楽は再び注目を集める。往年の歌手ビル・ヘイリーによる68年のイギリス公演は大成功を収め、翌年開催のロック・フェスティヴァル「ウッドストック」では、50年代風の音楽で知られるバンド、「シャ・ナ・ナ (Sha Na Na)」が話題を集めた (Guffey 2006: 98-100)。また、『アメリカン・グラフィティ』の成功に加え、70-80年代には、50年代のロックンロールに関する多くの年代記がジャーナリストにより書かれ、50年代の若者たちが見せた熱狂ぶりが描かれた⁸。エリザベス・E・ガフィ (2006: 112-3) は、アメリカにおいてこのリバイバルの担い手となったジャーナリストや一部の学生たちによる発言には、ベトナム反戦運動や学生運動の激化に対する反動から、それ以前にあった「失われた無邪気さ」を懐古する傾向が見られたと指摘する。

また、ガフィが指摘するように、このリバイバルは50年代を懐かしむ人々に加え、社会を批判する歌詞で76年以降注目を集めたパンク・ロックの一部関係者も取り込む。例えば、セックス・ピストルズの元マネージャー、マルコム・マクラレンは、60年代末からロックンロールのレコードを蒐集していたことで知られ (Savage [1991] 2005: 8)、70年代に服飾デザイナーのヴィヴィア

ン・ウェストウッドと開いた店「レット・イット・ロック」は、50年代風デザインで人気を得た（Guffey 2006: 104）。また、複数のパンク・ファンジンに寄稿していたイギリスのジャーナリスト、ジョン・サヴェージは、70年代パンクの年代記『イングランズ・ドリーミング』（[1991] 2005）で、50年代のロックンロールを賛美する。彼はロックンロールが、それを語るための語彙すらなかった50年代のイギリスに「宇宙船のごとく上陸し」、「新しい世界への望み」を伝えた、と評している（Savage 2005: 47）。

本稿で取り上げる『テンポラリー・ホーディング』誌における50年代ロックンロールの描写は、人種差別の高まりという文脈に位置づけられる。20世紀後半のイギリスでは経済衰退の中、非白人移民を実質的に制限した1962年の移民法に象徴されるように、人種差別が高まりを見せた。政治家イノック・パウエルによる68年の「血の河」演説は差別的な内容で知られ、また、70年代には「マギング」と呼ばれる暴行事件が、黒人の若者と結びつけられて報道される傾向も見られた（Hall *et al* 1978）。こうした中、1976年に歌手のエリック・クラプトンがライブの最中にイノック・パウエルへの支持を表明する事件があった。これに対し、音楽ジャーナリストらが反人種差別を呼びかけた運動が「ロック・アゲインスト・レイシズム」だ。この運動は、ザ・クラッシュをはじめとした賛同バンドによるライブ開催と、雑誌『テンポラリー・ホーディング』の発行で知られ、同誌ではデヴィッド・ボウイも、問題発言があったとして批判されている。

この『テンポラリー・ホーディング』の第5号は、1940年代生まれで、リバイバル期のバンド、「ザ・サンセッツ」等のマネージャーであった人物、ポール・バレットによる記事を掲載している。記事の中で彼は、50年代におけるロックンロールの誕生と人気ぶりを描写する。バレットによると、初期のロックンロール音楽は、かつてのアメリカにおいて、一般的に黒人の音楽であったリズム・アンド・ブルーズ（R&B）と、白人の音楽であったカントリー音楽が、互いに影響を及ぼしていたことを示すものだという。これを示す具体例として、彼は、黒人の歌手アーサー・クリュダップが書いた曲、「ザッツ・オーライ」を白人のプレスリーが録音したこと、また、黒人の歌手チャック・ベリーによる曲、「メイベリン」におけるカントリー音楽の影響を挙げる。また、50年代のアメリカ社会は、ロックンロールが「若い白人たちの墮落や世界中の病の原因だとして、人種差別主義者たちがその音楽[の広がり]を止めよう」と（Barrett

1978: 3) する状況にあった、とバレットは説明する。多くのラジオ局が黒人のミュージシャンによる「オリジナル」のロックンロールではなく、白人のミュージシャンによるカバー・ヴァージョンのみを放送したが、この状態は、若い白人たちの間で黒人によるレコードの人気の高まる中で続くはずもなかった、と彼は続ける。

バレットは、このように初期のロックンロールについて描写する中で、50年代におけるロックンロールの流行が、人種差別打破のポテンシャルを持っていたという認識を示す。

これらオリジナルのロックンローラーたちがしたことを知るには、黒人 [the negro] が投票権を得たのが、そのわずか前だったことを思い出せばいい。[中略] 当時は、[マカーシズムの影響で] ロックンロールのムーブメントに共産主義の陰謀という汚名を着せる人々もいた。ハリウッド映画、『シェイク・ラトル・アンド・ロック』が、ファッツ・ドミノやジョー・ターナー [ともに黒人の歌手] を起用した。[中略] 映画館やレコード・ショップ、ダンス・パーティにいた若い白人たちは黒人や黒人音楽と近づいた。そして「ジョディマーズ」[初期ロックンロールのバンド] の曲、「レッツ・オール・ロック・トゥゲザー」が本当に意味していたのは、ニール・セダカが言うように、「ロックンロールが、国会へ向けたどんな行進よりもアメリカを一つにするために多くのことをした」ということだ (Barrett 1978: 3)。

「投票権」の獲得という点に関し、バレットの念頭にあったのが、連邦議院選候補者等を選ぶ政党内予備選挙での人種差別を禁じた 1944 年の最高裁判所判決なのか、あるいは、彼が、投票権行使における人種差別を禁じた 64 年公民権法の成立とロックンロール流行の年代的順序を間違えていたのかは、記事の内容を見る限りでは判断できない。しかし、いずれにせよ、彼は、厳しい差別が続いた 50 年代におけるロックンロールの人気に注目し、この音楽を「人種の壁を壊した最初のマス・エンターテインメント」と位置付け、「ロックと人種差別は対立する関係になければならない」(Barrett 1978: 3) と述べる。

バレットがリバイバル期において初期ロックンロールに見出したポテンシャルが、50年代において当のミュージシャンたちやファンの意識するところであったかどうかはともかく、この記事が書かれた文脈を思い出すとき、次の点が注目される。すなわち、非白人に対する差別が強まり、マス・エンターテイ

ナーであるクラブトンらの発言が問題となる中、バレットが「人種の壁を壊した最初のマス・エンターテインメント」と理解する 50 年代のロックンロールの誕生と人気にまなざしが向けられ、この音楽が持っていた、「人種の壁を壊す」ポテンシャルが見出されているのだ。そして、50 年代のロックンロールに人種差別打破のポテンシャルを見出すことが、有名歌手の発言が問題となっていた 70 年代後半の社会状況に対する批判の視座をバレットに与えている。彼の発言は、ノスタルジアが過去の事物の持っていた可能性に光を当てるとき、それは保守主義批判にもなりうることを示すものだと思う⁹。

結びにかえて

さて、本稿では、限られた形ではあるが、現代の消費文化における事例を取り上げ、ノスタルジアが社会批評について持つ重要性を考察してきた。否定的に認識される現在において、過去の事物へのまなざしは、かつての伝統や慣習の復古を唱える主張となる場合が多い一方、過去の事物がはらんでいたが潰えてしまった、ありえたはずの未来を救い出し、ベンヤミンによるフレーズを思い出すなら、「危機において光る記憶をつかむ」試みにもなりうるものだ。ライトやタノックが示唆したように、ノスタルジアは、左翼の批評家たちによる批判の的となってきた保守主義と必ずしも結びつくものではない。本稿で取り上げた『テンポラリー・ホーディング』の記事はこの点を改めて示すものだと思う。

本稿で扱えなかった議論もある。近代資本主義社会における時間の認識に関する議論や、スザンナ・ラドストーン (2007) のノスタルジア論に代表される、精神分析的アプローチの検討は今後の課題としたい。

注

- 1 保守主義は、これまで様々な地域および時代において、この名で呼ばれてきた思想の多様さゆえに、単純な定義の難しい用語である。例えば、イギリス保守党内にも、福祉政策の存続を認めた立場や、警察などの権限拡大を除き、「小さな政府」を目指した新右翼がある。また、保守主義思想の系譜には、前近代的社会の賛美からというより、むしろ近現代における集産主義や管理社会に対する疑念から、近代の合理主義を批判し、生活における具体的な行為に関する抽象化しがたい知識とその習得により保存される「行動の伝統」を重視したオークショット (1988) のような思想家もいる。保守主義は、旧来の伝統や価値観

などの復古や存続のみを目的とする訳ではなく（例えば、添谷（1995）を参照されたい）、むしろ、社会状況の変化に応じて制度等の漸進的な改変を認めるが、それ以上に、慣れ親しんだ旧来の伝統や慣習、価値観などを重視する立場として理解する方が適切であろう。そして、こうした旧来の伝統や価値観に対する賛美が少数派への差別や旧来の差別の黙認を伴う可能性は確かにあり、この点は決して看過されるべきではないが、過去の事物を「伝統」と呼び尊重することに関し、一概に単純な価値判断を下すことが難しいことも確かだ。「伝統」なるものを語ることが差別への批判につながる場合もある。例えば、イギリス発祥の若者文化「スキンヘッズ」は、一般的に、マイノリティの人種や民族集団に対する差別の担い手として描かれることが多く、こうした差別に関わった一部のスキンヘッズは確かにいた。しかし、70年代末から90年代にかけてのスキンヘッズ・リバイバル期には、一部のスキンヘッズが、1960年代末の初期スキンヘッズに見られたスカ音楽やレゲエ音楽——それらは、ジャマイカ発祥であり、主にアフリカ系の出自を持つミュージシャンにより演奏されていた——の愛好に注目し、この愛好がスキンヘッズの「伝統」であると唱えた。そして、この「伝統」からほど遠いものとして、人種差別を批判する者もいた（例えば、Marshall（1994: 150）を参照）。

- 2 本稿での英語文献の日本語訳と「[]」内の補足は尾山による。また、「[]」内の英語は原文での表記である。
- 3 ノスタルジアを近代特有の現象とする議論もあるが（例えばTester 1993を参照）、過去の事物に対する憧れは近代だけの現象ではない。例えば、ルネサンスは古代ギリシアやローマの文芸を復興させた運動だ。しかし、本稿の関心は、懐古の起源よりも、過去への関心が近現代の社会批評にとって持つ重要性を考察することにある。
- 4 デーヴィス（1979: 109-10）も、ノスタルジアがしばしば帯びる保守主義的な傾向を指摘する。彼は、20世紀後半のアメリカにおける映画や批評家の発言など多くの事例を取り上げ、過去の社会を理想化する傾向を、安定を誇ったアイゼンハワー時代以後の60年代におけるケネディ暗殺や学生運動の高まりなど、社会の混乱に対する反動として説明を試みた。
- 5 ベンヤミンは「廃墟」となった過去の事物にまなざしを向け、そこから「積極的な」部分を救い出そうとする歴史家や蒐集家を、「歴史の天使」と呼んだが、この「廃墟」は、現在において既に廃品と化した古い商品や過去の事象のみを意味する訳ではない、という点も付け加えておくべきだろう。この「天使」のまなざしは、現在において売られている新商品にも、あるいは今まさに起こっている事象にも、未来においてそれがすでになっているであろう「廃墟」の状態を見てしまうものである。アドルノ（1984: 73）はベンヤミンについて、「かれを魅惑したのは、化石のなかに [中略] 凝結している生命をめざめさせることだけではなかった。生きたものをもかれは、それがとっくに滅び去ったものであるかのように、考察することを好んだ」と述べているが、ベンヤミンにとっての「廃墟」とは、現在における新商品にも見出されるべきものだったと言

えよう。

- 6 出来事一般はその終わりを迎えたときに初めて省察が可能になるという歴史観は、ヘーゲルが『法の哲学』（2000）の序文でミネルバの梟の例えを用いて示した歴史観でもある。
- 7 文芸批評においても同様の指摘はある。例えば、スヴェトラナ・ボイムはノスタルジアの「ユートピア的側面」を指摘する（Boym 2001: xiv）。またテリー・イーグルトンは、「ヴァルター・ベンヤミン的な人物にとっては、ノスタルジアに革命的な意味が与えられることさえある」（Eagleton 2000: 21）と記している。
- 8 例えば、1970年創刊の雑誌『ロックンロール・シーン』は、この音楽が生んだ「新しい熱狂」（‘Rock’n’Roll’ 1970）を、また、クリス・メイによる『ロックンロール』（1974）は、58年に放送開始したテレビ番組『オー・ボーイ』に対する若者の熱狂に注目している。また80年代における同様の事例として、ジョニー・ステュアートによる『ロッカーズ』（1987）が挙げられる。
- 9 50年代のロックンロールが「人種の壁」を超えたという語りは、同誌に掲載されたジャーナリストのマイクル・グレイによるプレスリーの追悼記事にも見られる（Gray 1977）。また、社会主義者団体、ザ・レヴェラーズの機関誌『ザ・レヴェラー』（The Leveller）では、プレスリーに代表されるロックンロールを、アメリカの伝統的な性別観に対する脅威であったと再評価する記事もある（Cooper 1978）。

引用文献

- アドルノ、Th. W. (1984) 「ヴァルター・ベンヤミンの特質」 野村修訳 『ベンヤミンの肖像』 好村富士監訳、東京：西田書店、65-88
- オークショット、M. (1988) 『政治における合理主義』 嶋津格ほか訳、東京：勁草書房、198-236
- 添谷育志 (1995) 『現代保守主義の振幅——離脱と帰属の間』 東京：新評論
- ヘーゲル、G.W.F. (2000) 『ヘーゲル全集 9a 法の哲学 上巻』 上妻精ほか訳、東京：岩波書店
- ベンヤミン、W. (1969) 「歴史哲学テーゼ」 野村修訳、『ヴァルター・ベンヤミン著作集 1』 東京：晶文社、112-31
- (2003a) 『パサーージュ論』 第1巻、今村仁司ほか訳、東京：岩波書店
- (2003b) 『パサーージュ論』 第3巻
- American Graffiti*. (1973) Dir. G. Lucas, Universal
- Barrett, P. (1978) ‘Rock’n’Roll Is Black ’n’ White Alright!’ *Temporary Hoarding* 5: 3
- Boym, S. (2001) *The Future of Nostalgia*. New York: Basic Books
- Cooper, L. (1978) ‘Rock around the Cock.’ *The Leveller* 19: 10-2
- Davis, F. (1979) *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*. New York: The Free Press
- Doane, J. & Hodges, D. (1987) *Nostalgia and Sexual Difference*. New York: Methuen
- Eagleton, T. (2000) *The Idea of Culture*. Oxford: Blackwell
- Gray, M. (1977) ‘Elvis.’ *Temporary Hoarding* 3: 2

- Guffey, E. (2006) *Retro: The Culture of Revival*. London: Reaktion
- Hall, S. *et al* (1978) *Policing the Crisis: Mugging, the State, and Law and Order*. Basingstoke: Palgrave Macmillan
- Heller, A. (1983) *A Theory of History*. London: Routledge & Kegan Paul
- Hewison, R. (1987) *Heritage Industry: Britain in a Climate of Decline*. London: Methuen
- Jameson, F. (1991) *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. London: Verso
- Lowenthal, D. (1985) *The Past Is a Foreign Country*. Cambridge: Cambridge UP
- May, C. (1974) *Rock 'n' Roll*. London: Socion
- Marshall, G. (1994) *Spirit of '69: A Skinhead Bible*. Lockerbie: S.T. Publishing
- Pickering, M. & Keightley, E. (2006) 'The Modalities of Nostalgia.' *Current Sociology* 54(6): 919-41
- Radstone, S. (2007) *The Sexual Politics of Time*. London: Routledge
- 'Rock 'n' Roll.' (1970) *Rock'n'Roll Scene* 1: 2-3
- Rojek, C. (1993) 'Fatal Attractions.' in C. Rojek *Ways of Escape: Modern Transformation in Leisure and Travel*. London: Macmillan, 136-72
- Samuel, R. (1994) *Theatres of Memory*. London: Verso
- Savage, J. ([1991] 2005) *England's Dreaming*. London: Faber and Faber
- Stuart, J. (1987) *Rockers!* London: Plexus
- Tannock, S. (1995) 'Nostalgia Critique.' *Cultural Studies* 9(3):453-64
- Terdiman, R. (1993) *Present Past: Modernity and the Memory Crisis*. Ithaca: Cornell UP
- Tester, K. (1993) *The Life and Times of Postmodernity*. London: Routledge
- Urry, J. (1990) *The Tourist Gaze*. London: Sage
- Wright, P. ([1985] 2009) *On Living in an Old Country*. Oxford: Oxford UP